2002 - 4 - ①

『JASPM NEWSLETTER』第51号 vol.14no.1 p16-17 日本ポピュラー音楽学会
2002.2.4.発行

言語ゲームとしての音楽
：ヴィトゲンシュタインから音楽美学へ
矢向 正人 著（東京：勁草書房）
2001.9/20刊、 3400円

評者：橋爪 大三郎

本書は、題名からも明らかなように、20 世紀を代表する哲学者ルードヴィッヒ・ヴィトゲンシュタインの後期哲学の中心概念である「言語ゲーム language game」によって、音楽美学を再構築しようとする野心的、意欲的な試みである。この種の試みがかつてなされたことがあるのかどうか、専門外の評者は寡聞にして知らない。おそらく、世界で初めての試みではないかと思う。

言語ゲームと音楽美学。この組み合わせに、必然はあるのか。《言語ゲームに関心の深い読者であればあるほど、音楽を言語ゲームとみなす発想に違和感をもたれるかもしれない》（はしがき）と著者も危惧するように、そもそもこうした試みについていけない読者もいるかもしれない。第一章「美の介在をめぐるゲームとしての音楽」は、こうした違和感を十分に意識したうえで、音楽を言語ゲームとして理解することで、その美的本質がはじめてあきらかになるという著者の議論を展開する。

著者によれば、従来の音楽美学はみなトートロジーに陥っており、音楽の美を解明することができていなかった。ある楽曲が美しいのはなぜか。それは、ある形式（たとえば、協和音）をそなえているからだと言われる。ではなぜひとは、その形式を美しいと感じるのか。そのことになると、説明に窮する。せいぜい、「それは美しい形式だから」と言うしかなかった。すなわちトートロジーである。

著者は、このトートロジーをはっきりみつめ、音楽を「美のブラックボックス」と置くところから始める。美は、個々の楽曲を離れては存在しない。人びとが、さまざまな楽曲に対して示す肯定的なふるまい（是認の身振り）が、そこに「美」を存在させるのだという。すなわち、人びとのふるまい（言語ゲーム）のほうが実体的で、美はその効果なのである。こうした音楽論の基礎は、さらに広い文化的、人間学的ひろがりのなかで確認されている（第二章「音楽の始原へ」）。

第三章「協和・不協和のシステム：見えざるXとしての不協和」では、西欧調性音楽の歴史を素材に、協和音と美の関係が具体的・詳細に検討されている。この部分を紹介することは、評者の能力を越えているので略するが、音楽史を言語ゲームを補助線にして再解釈する果敢な試みとなっていることは間違いない。さらに第四章「リズム：現前の是認」は、和音と相補的な、もうひとつの音楽の要素である、リズムについても考察を加えている。

本書で多少わかりにくい部分があるとすれば、たとえば、音楽一般の原理論にあたる部分と、西欧調性音楽の具体的な素材を扱う部分とが、「美」の「言語ゲーム」として同じものなのか、どのような関係になるのかという点であろう。また、音楽のどのレヴェルが言語ゲームなのか（ある時代の音楽ジャンルの全体か、ある楽曲か、楽曲内部のさまざまな要素か）も、わかりにくい部分がある。ヴィトゲンシュタインのオリジナルな議論への参照も、あっさりしすぎているように思う。聞けば、著者はさらに筆を改めて、構想を発展させているようなので、今後にも期待したい。（東京工業大学）

おきけ 週刊読書人 2002.8.9

橋爪 大三郎著
その先の日本国へ

「民主主義」の観点から

ラジカルな日本改革論を提言する

松原 隆一郎

社会学者・橋爪氏が九〇年代末から最近にかけ綴ってきた社会時評集。社会・教育・政治の各分野について、比較的短い文章を収めている。

テーマは多岐にわたっている。家族問題やひきこもり、街づくりからレジャー、新宗教、大学改革、小泉人気、歴史教科書に首相参拝、改憲等々、一見したところ共通点がない。だが総じて言えるのは、「民主主義」の観点から改革案を提言するという姿勢だ。ここで橋爪氏が「民主主義」と言うのは、人々が自発的な合意すなわち「契約」によって自身を拘束するルールを決めること。したがって、憲法さえもそれが存在する以前の白紙状態に遡って修正案が提案されねばならない。それはたとえば平和について検討するのに、「第九条があるから」といった論拠を持ち出さないということだ。憲法が存在しない地点に戻り、平和を構築するすべを再考するのである。

これは戦後日本においては、もっとも急進的な姿勢であろう。「革新派」は政治にかんする既成の合意システムの革新を唱えてきたが、憲法については一切の修正を認めず、逆に「保守派」は政治システムその他の制度については既成のものを守るが、ことは憲法については革新を迫ってきた。橋爪氏は、それらのいっさいについて民主主義によって改革しようと唱える。これによって憲法から大学、街づくりなどすべての改革を行おうというのである。その意味で本書は、ラジカルな民主主義者による日本改革論だと言える。

今、こうした立場が打ち出されねばならない理由もまた明確だ。昨年の九・一一テロ以降、国際安全保障体制が一変したからである。国が戦争や紛争の主体である場合には、消極的に（片務的に）のみ集団安全保障につきあう国があっても構わない。日米安保はそうして機能してきた条約である。ところがテロは、すべての国が積極的に撲滅に協力しない限り、その綻びに寄生する。したがって解釈改憲では収まらないため、憲法第九条を改正し、集団安全保障に積極的に関与するよう舵取りを変えねばならないと言う。

文部省による教育制度の一元管理を緩和することなどを含め、政策論までほとんどの意見に賛成できる。ただ、アメリカ的な教育方式やアメリカを核とする反テロ集団安全保障への手放しの賛意には、少々違和感がある。橋爪氏は、安全保障にかかわる会議でアメリカと対等に渡り合うためにもまず日本固有の立場を明確に打ち出す必要があるととらえる。けれども、ではその日本の固有性はどこに由来するものだろうか。橋爪氏は人間関係の根底に言語を置くが、言葉は過去において意味を蓄積してきたものだ。したがってゲームをクリアするように過去の経験を消去することはできない。ところが一方で、氏は近代資本主義のエートスをキリスト教だとし、それの疑似等価物でしかなかった天皇制をエートスとしたために日本は改革もままならぬ反近代的組織しかもてないのだという。

けれども、近代とは個人主義の時代であり、民主主義も資本主義もアメリカ的なものが至上であるというのは、社会学の思いこみでしかない。近代資本主義のエートスとしてプロテスタンティズムが必須だというウェーバー説自体が未だに反論にさらされており、日本のみならずアジア諸国までが経済発展しつつあるこの時代には、ますます疑義は深まっている。こうした社会学的思考様式にも、構造改革が求められているのである。（まつばら・りゅういちろう氏＝東京大学教授・社会経済学専攻）

★はしづめ・だいさぶろう氏は東京工業大学教授・社会学専攻。東大大学院博士課程修了。著書に「言語ゲームと社会理論」「現代思想はいま何を考えればよいのか」「言語派社会学の原理」「世界がわかる宗教社会学入門」など。一九四八（昭和23）年生。

46判・324頁・2200円
勁草書房
4-326-65267-5

『群像』第57巻第4号（株）講談社 p332-333 2002.4.1発行

2002-4-②

書評

ポスト・ポストモダンと、現象学の復権

竹田青嗣……【言語的思考へ　脱構築と現象学】

橋爪大三郎

思想家・竹田青嗣が全力投球した、掛け値なしに重量級の書物だ。

本書を五〇頁も読み進まないうちに、印象深く思ったことが二つある。ひとつは、思想の本質的な営みは、ある時代の孤立し突出した創造的な達成が、別の時代の孤立し突出した創造的な努力と、交響しあうところにしかないのだということ。もうひとつは、創造的であるとは、時代の常識（のある部分）をくつがえし、ときには過剰な読み込みや誤読にさえもとづいて、世界の新しい像を描きあげること。本書は、相前後して上梓された柄谷行人『トランスクリティーク』、東浩紀『動物化するポストモダン』などと並んで、日本におけるポスト・ポストモダンの本格的な到来を告げる書物である。

本書は、著者独自の現象学に立脚して、ポストモダンの方法的核心であるデリダの脱構築（デコンストラクション）に対する批判を試みる。デリダは『声と現象』で、フッサールの「音声中心主義」を批判した。「意識」と「言語」という本来は一致しないものを、フッサールの現象学は《「声」の役割の特権性》によって一致させようとする。しかしエクリチュールにおいては「作者の死」、すなわち、テキストの完全な多義性が露出するではないか。これを根拠に、デリダは脱構築の方法を確立し、声の特権性の歴史であった形而上学の系譜（およびそれに基礎を置く資本主義近代の総体）を解体しようとする。

しかし竹田によると、デリダの批判は、言語の本性についての誤解にもとづくものだ。言語はすべて、発語主体（発語者の〈意〉）→言語表現→受語主体（意味の〈理解〉）という流れのなかにあり、特定のコンテキストのもとでその意味が確定するようになっている。デリダのいうテキストの多義性やさまざまな哲学のパラドックスは、言語表現からこうしたコンテキストをすべてはぎ取り、《一般言語表象》へと抽象してしまったためにうまれた仮象である。正しい現象学の理解にもとづいて言語の本性を考えるなら、言語がコンテキストのもとで人びとに確信をもたらす構造がとらえられる、という。

本書はまた、東浩紀『存在論的、郵便的』のデリダ擁護論を、批判的に検討する。東は《初期デリダの形而上学解体の仕事のうちには…「否定神学」的要素が見出されるが、デリダはやがてこのことについて自覚的となり、後期においてはこれを超え出る可能性を探究している》（二七二頁）と言うが、竹田によるとこうした東のデリダ擁護論は成り立たない。ここで「否定神学」とは、懐疑論的相対主義や批判のための批判といった傾向をいう。竹田によれば、デリダはたしかにそうした自覚をもったかもしれず、「語りえぬもの」（もともとの「否定神学」では神にあたる）をひとつだけ想定し実体化してしまうかわりに多数性の思想をたてようとした。けれども《そもそも「語りえないもの」という中心概念自体がポストモダン思想のメタ論理的性格によって要請されているのだが、…その点に…最大の弱点がある。…ただ「幽霊」や「郵便」という概念によって脱構築思想を形而上学化することへの「禁止要求」を添付したにすぎない》（二八二～三頁）。

竹田は、哲学は《必然的に「存在の謎」と「言語の謎」というふたつのアポリアを呼び寄せる》（七二頁）のだという。本書はこのうち、「言語の謎」を極点まで追い詰めた二人の哲学者、デリダとヴィトゲンシュタインに焦点をあて、彼らの徹底した懐疑論の到達地点をまず確認する。そして、いわばその懐疑論の手袋を裏返すようにして、現象学的な《「信憑関係」（＝確信成立の構造）》（一三二頁）へと再生させていく。《現象学的言語理論は、言語行為の本質を「発語主体―言語表現―受語主体」という三項間の信憑構造として措定する。》（二五九頁）《その「確信」は本質的に信憑であり、したがって絶対的な確定に至ることは決してない》（一三五頁）。

デリダの脱構築という方法の限界と問題点を内在的に批判することは、われわれの時代にとって本質的な意味をもつ。脱構築による形而上学批判の方法は、圧倒的な優位を人びとに印象づけ、ポストモダンの流行をもたらした。ところがポストモダンは、マルクス主義にかわって資本主義近代を批判する役割を担うはずだったが、その批判は「否定神学」的な全面否定となった。懐疑論的な全面否定は、全面的な現状肯定と変わらない。デリダの脱構築の方法を批判的に克服することは、思想が現実に対して積極的な態度を取ろうとする場合、まずまっ先に行なわなければならない課題である。本書はこの点、画期的なものだと言える。

このように大きな図柄を描き出した本書であるが、評者は、本書の論点のすべてに同意するわけではもちろんない。ごく簡単に、論点を列挙しておこう。まず、著者の現象学は評者がフッサールを読んだときの印象とかなり異なる。流通している理解を「俗流」と切り捨てるならば、いちど詳しい論拠と典拠をあげる必要があろう。もっとも評者は、仮にこれが創造的誤読であっても、歓迎する。第二に、著者のいう現象学的な言語理論が、言語の謎を首尾よく解明するものかどうかは検討を要する。第三に、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームを、徹底した懐疑論とだけみている点。評者に言わせれば、言語ゲームは現象学よりも、著者のいう信憑構造をはっきり示す出来事にほかならない。などなど。

著者の文体は、平明そのものとは言えないが、簡潔で適度に厳密で、明快である。参照される古典は、古代ギリシャ哲学からヘーゲル、カント、デカルト、ラッセル、ハイデガー、ラカン、レヴィ＝ストロースと多彩をきわめ、初学者にとっても有益であろう。著者が長年、丹念に読み進めてきた古典についての造詣が、巧みに圧縮されている。「哲学する批評家」という、業界の掟を離れた筆者のポジションだからこそ可能となった、思い切った構成の意欲作である。今後も広く論議をよぶことであろう。

（径書房刊・本体二二〇〇円）

2002-4-③

日本経済新聞　2002年(平成14年)5月26日(日曜日)

【第三種郵便物認可】

Sunday Nikkei

虚無の信仰

ロジェ＝ポル・ドロワ著

仏教への偏見 19世紀欧州に探る

十八世紀の末から十九世紀の末までの百年間、仏教がどのようにヨーロッパ世界で誤解されたかを、丹念に調べた本である。

サンスクリット語の研究が進むにつれ、インド哲学や仏教の詳しい内容が知られるようになり、仏教学も徐々に発展していった。けれども、専門家でない人びとは、あやふやな知識にもとづいて、仏教の怪しげなイメージをふくらませていく。仏教は、涅槃（＝魂が存在しなくなること）を待望する恐るべきニヒリズム、つまり、虚無の信仰だというのである。ヘーゲル、ショーペンハウアー、ニーチェといった思想家たちも、こうした偏ったイメージに多かれ少なかれ影響されていた、と著者は言う。

なぜこのような誤解と偏見が生じたのか。それは、ヨーロッパのキリスト教社会が、無神論に脅かされていたからだ。《ブッダの無神論が問題とされるとき、真の問題は、ヨーロッパの無神論なのである。》救済されるべき魂が、仏教の覚りでは消滅してしまう。永遠の生命なしの、むきだしの死。それを願う信仰。ヨーロッパの人びとは、仏教という鏡に映る自分の姿をみて、恐怖したのだ。

著者ドロワは、一九四九年生まれのフランスの哲学研究者で、インドにも詳しい。花山信勝編『仏教文献目録』（一九三〇年代までの欧文文献一万点あまりをまとめたもの）に触発されたという。仏教はともかく、当時のヨーロッパ思想の舞台裏について、細かなことまでよくわかる本である。

そこで、こんな想像をしてみる。日本の幕末から明治維新にかけての時期、本書が紹介するように、西欧世界は仏教に対する偏見と恐怖のピークにあった。それならば、西欧世界と接触した日本人は、仏教に対するマイナス・イメージをことあるごとに吹き込まれたのではないだろうか。それが、廃仏毀釈の背景になったのではないか。神仏分離はもちろん、日本のプレ近代社会の内発的な必然にもとづくものだが、西欧世界の仏教に対する偏見も、その後押しをしたと考えてみてもよいのかもしれない。

（島田裕巳・田桐正彦訳、トランスビュー・二、八〇〇円）
▼著者は49年パリ生まれ。仏国立科学センター研究員。著書に『暮らしの哲学』など。

東京工業大学教授　橋爪　大三郎

2002-4-⑧

日本經濟新聞　2002年(平成14年)12月22日(日曜日)

Sunday Nikkei

〈民主〉と〈愛国〉

小熊　英二著

公共性の思想を再発見

九百六十六頁と大部だが、中身も重量級だ。面白い。正月休みに通読するなら、この一冊である。

『単一民族神話の起源』『〈日本人〉の境界』と、過ぎた時代の言説を丹念につなぎ合わせて、意想外の図柄を描き出すジグソーパズルのような仕事を手がけた著者が、今回は敗戦から一九七〇年までの戦後の言論を扱う。荒正人、石母田正、清水幾太郎、竹内好、中野重治、南原繁、丸山真男ら懐かしい名前の知識人たちの言説の断片が、万華鏡のように戦後思想の情景を展開させていく。

戦争は、《敗戦後の日本に、……巨大な共同体意識を生みだしていた》。そのうえで著者は、津田左右吉らオールド・リベラリスト、丸山真男ら戦前派、三島由紀夫ら戦中派といった世代の違いによって、微妙な温度差があると指摘する。どの年代でどう戦争を実体験し、どんな傷を受けたかが、各人の言動を規定している。《戦後思想とは、戦争体験の思想化》にほかならないのだ。

つぎに著者は、敗戦直後の混乱期（第一の戦後）と、五五年以降の第二の戦後を区別する。いま戦後として知られているのは、第二の戦後にすぎない。第一の戦後に論じられた切実な課題を、当時の文脈のまま掘り起こすと、共産党が愛国を唱え、保守が憲法を擁護するといった「ねじれ」も必然的だったと理解できる。

そして本書の圧巻は、後半。吉本隆明、江藤淳、鶴見俊輔、小田実ら、より若い知識人たちの内実を検証する各章だ。彼らは「戦後知識人」を批判し地歩を築いた。だが、この世代特有の戦争体験に制約されており、批判も半ばは誤解にもとづくという。多数の知識人を共通の土俵に乗せその布置関係を明らかにする著者の方法は、独創的で斬新である。

戦後思想を縦覧した著者は、言論の根底に、言葉にならない心情を発見する。国家が解体した以上は、自己が自己のまま他者と共存する公共性を構想したい。それが「民族」「国民」と呼ばれた。本書は〈民主〉〈愛国〉をキーワードに、戦後の時代が模索した公共性の思想を再発見したのである。

（新曜社・六、三〇〇円）
▼おぐま・えいじ　62年東京生まれ。東大大学院博士課程修了。慶応大助教授。『単一民族神話の起源』でサントリー学芸賞。

東京工業大学教授　橋爪　大三郎

『文藝春秋』8月号 第80巻第10号 p370-371 (株)文藝春秋 2002.8.1発行

高橋秀実

からくり民主主義

沖縄、原発、諫早……現実はマスコミの図式にはまらない

評者● 橋爪大三郎 東京工業大学教授

ノンフィクション作家・高橋秀実（ひでみね）氏の、丁寧な取材が光る。沖縄の米軍基地、諫早湾の干拓、若狭湾の原発……。マスコミをにぎわわせ、人びとによく知られた事件を追いかけて、その裏側を掘り下げた。

高橋氏の取材力に、私は唸ってしまった。

高橋氏は、取材を拒否された経験がほとんどないという。《現地の人々はマスコミに話し足りなかった様子で、出遅れてきた私をむしろ歓迎してくれます。マスコミ批判から始まり「実は……」とえんえんと話をしてくれるのです》（終章）

現実の世界は複雑だ。取材をすればするほど、わけがわからなくなる。そこでまた、取材する。ますます混沌としてくる。そうやって悩み苦しんだ挙げ句、その先に突き抜ける。マスコミがふり回す単純な図式など、まったく当てはまらない。にもかかわらず、とりあえず単純な図式が通用してしまうという「からくり」が、戦後民主主義の正体ではないのか。

高橋氏の取材は、取材する側の単純な図式をくつがえし、解体するための作業である。単純な図式をひきはがしてみると、現実をたくましく生きる人びとの等身大の姿が浮かびあがってくる。

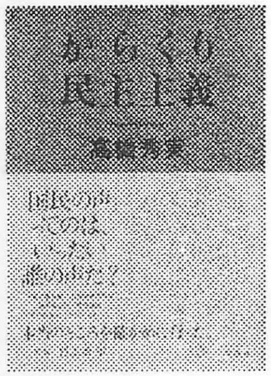
たとえば、第6章「反対の賛成なのだ」。マスコミは、沖縄の米軍基地をめぐって、反対派／賛成派が対立しているという構図をまず前提にする。ところが基地の前で反対を叫ぶ人びとは、地元民から「赤ハチマキ」「赤旗ふやー（ふる人）」と呼ばれるよそ者だったり、米軍基地用地の借地料（総額で年間八百二十一億円）に反対派を含むかなりの人びとの生活がかかっていたりする。反対運動が盛んなほど借地料が値上げになるという皮肉な関係もある。沖縄の「美しい心」「苦難の歴史」も、《踏みつぶされてきた、という考えを増長させること。……日本人全体と対比させることにより、自分たちのグループとしてのアイデンティティを持たせる方向づけをする宣伝活動、懐柔策》など、アメリカ軍が進めた沖縄占領の心理作戦に後押しされたものだという。

第9章「ぶら下がり天国」は、富士山青木ヶ原樹海の地元を訪ねる。あまり自殺が多いので、住民は「自殺」と聞くとぷっと吹き出し、消防団はなるべく余計な遺体（おまけ）をみつけないように捜索を行なう。自殺志願者のマナーの悪さと身勝手。マスコミが作り出したイメージと、現実とのギャップが検証されていく。

高橋氏の文章は、適度に乾いていて、軽妙で、よく考えるとおかしい。じっくり相手に耳を傾けるけれども、のまれてしまうことはない。適度な距離感と平衡感覚があって、読んでいて安心できる。

本書に解説を寄せている村上春樹氏は、つぎのようにのべている。《僕には高橋さんの感じていること、言いたいことがとてもよくわかった。……僕がサリンガス事件をあつかった『アンダーグラウンド』（講談社）を書いたときにも思い知らされたことだが、世の中のものごとには多くの場合、結論なんてないのだ。……でも、僕は確信しているのだけれど……物書きの役目は……単一の結論を伝えることではなく、情景の総体を伝えることにある……》。高橋氏の方法に共感し、その本質をよく伝えていると思う。

消費社会とポストモダンと冷戦崩壊と、価値相対主義と湾岸戦争とオウム事件を経た日本では、戦後民主主義が歯周病にかかってぐらついている。それでも、持ちこたえているようにみえるのはなぜか。高橋氏はそれを、「からくり」とよんだ。ポスト団塊世代がくぐり抜けた特有の困惑と、それに対する特有の足のふんばり方を、私はそこにみる。



草思社
1800円

2002年単行本・文庫本ベスト3
リテレール別冊16『ことし読む本いち押しガイド』p26-27

メタローグ　2002.12.1発行

Hashizume Daisaburo

橋爪大三郎

その先への もう一歩

ことしの本ベスト3

『トランスクリティーク カントとマルクス』
柄谷行人／批評空間

『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』
東浩紀／講談社現代新書

『言語的思考へ 脱構築と現象学』
竹田青嗣／径書房

二〇〇一年は、日本の思想的なフロンティアが、ポストモダンのその先へもう一歩踏み出した年だった。ここにあげた三冊は、9・11テロよりも前に書かれている。しかし、9・11テロ以後の状況でこそ読まれるべきものとなっている。

柄谷氏の『トランスクリティーク』は、マルクスによる資本主義批判の発想の根源を、カントの哲学に見出そうとするもの。読解としてどこまで妥当か、危ういものを含んでいるが、その仕事は切実である。冷戦以後の世界では、世界が単一の市場経済に組み込まれグローバリゼーションが否応なく進行し、対抗的なプランを資本主義体制と違ったかたちで提出することが格段に困難となるからだ。にもかかわらず、多くの耐えがたい矛盾が放置されている。

東氏の『動物化するポストモダン』は、グローバリゼーションを起動させるひとつであるIT革命が、特に若い人びとの日常をどのように変質させるかを探る。いわゆるポストモダンが、大きな物語の崩壊のあとに生じた過渡的な段階であり、そのあとに動物的＝データベース的世界が拡がると指摘する。氏の、情報セキュリティについての最近の議論も興味ぶかい。

竹田青嗣氏の『言語的思考へ』は、現象学をベースにしたポストモダン的価値相対主義への原理的批判の書。デリダによる「音声中心主義」批判がどこまで有効か、を厳密に吟味するところから出発する。そして、ポストモダン思想の扱う問題は、言語をその活き活きした文脈から切り離し「一般言語表象」と捉えるところから生じる擬似問題である、と批判する。フッサール現象学の正当な読解にもとづく「言語的思考」こそが、ポストモダン以後の思想的混迷を打破すると主張。ヴィトゲンシュタインの言語思想についても、突っ込んだ検討が加えられている。私とは見解を異にする点もあるが、大きな達成に敬意を表する。

（社会学）

ウソはどこまで可能か

ウソに秘密に暴露に謝罪●●●●●●●●●●●●●●

ウソの定義は、本当でないことを言うこと、である。ウソを言う人物を、ウソつきという。

ウソの反対は、本当である。本当のことを言う人物は、本当つきということになる。ウソと本当が反対概念なのはよいとして、ウソつきと本当つきと、2種類の人間がいるのだろうか。

冷静に考えてみると、そうではないことがわかる。人間は、ときにウソを言い、ときに本当のことを言うのであって、ひとによってその割合がまちまちであるにすぎない。ひとより高い割合でウソを言う人物を、ウソつきというだけで、なにもウソつきがいつもウソを言うわけではない。（そういう変なウソつきが実在すると考えると、「クレタ人はウソつきだ」というたぐいのパラドックスが生まれる。）

ウソだけを言い続けることができるだろうか。

数学に、不動点定理というものがある。コーヒーをかき混ぜても、少なくとも一点は動かない。ケモノの体表にはつむじ（不動点）ができる。これと似たメカニズムによって、言葉が現実をおおむね写しとるものだとすると、そのすべてが真実からズレてしまうことはありえないと言えそうな気がする。

われわれの言語は、大部分の場合に本当のことを言うように、できている。それが言語というものなのだ。

ウソが混じっていることを承知で、相手の言うことをそのとおりだと思う。これがわれわれの社会の、信頼の基本的なかたちなのである。

週刊読書人
第2467号　（第3種郵便物認可）　2002年（平成14年）12月20日（金曜日）

二〇〇二年の収穫
印象に残った本〈全120冊〉

橋爪大三郎

竹田青嗣『言語的思考へ』（径書房）。過去一〇年以上にわたり哲学・社会科学の古典を精読してきた著者が、ポストモダン思想を根底から批判する達成に敬意を表する。フッサールの現象学を創造的に再解釈し、デリダのフッサール批判を切り返す。「一般言語表象」の概念は秀抜。

東浩紀『動物化するポストモダン』（講談社現代新書）。人を喰ったタイトルだが、内容は創見に満ちている。大きな物語が崩れたあと、代わりをさがそうとした世代のあとから、データベースの上で戯れる新しい世代が現れた。インターネット以降の原風景として記憶されよう。

小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社）。すでにかえりみられなくなった近過去の言説を再発見し、配列し、そこからひとつの図柄を描き出す。単純にみえて真似のできぬ、著者ならではの雄大な作業だ。同時代の言論に立脚点を与える、圧倒的な労作。

（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

『現代』　第36巻第12号　p287-288　（株）講談社　2002.12.1発行

2002-4-(5)

本のエッセンス

独自の思想を再評価

世代超え刺激的に

六〇年安保闘争や全共闘世代に大きな影響を与え、その後も独自の考察を続けている思想家の全体像を読み解く「吉本隆明をめぐるシンポジウム」が、東京工業大の公開講座として開催された。「言語にとって美とはなにか」「共同幻想論」「ハイ・イメージ論」「アフリカ的段階について」。一九六〇―九〇年代の主要著書を手掛かりに、現在の思想の地平から吉本思想を再構成する試みだ。

パネリストは明治学院大教授・加藤典洋、同・竹田青嗣、京大助教授・大沢真幸、「司会が東京工業大教授・橋爪大三郎の各氏。七〇年前後に同時代としての吉本思想に親しんだ竹田、橋爪、〝吉本ブーム〟に反感を覚えていた加藤、当時は小学生だった大沢。各氏の「吉本体験」の違いもあって、議論が弾んだ。

吉本隆明めぐるシンポ

吉本隆明氏

吉本の存在が大きいのは「ヨーロッパ思想が入ってくるのを待って、使い回しする」戦後日本の思想界にあって「全部一人で、オリジナルに根本的に考えた」（竹田）ところにある。

シンポでは「関係の絶対性」「対幻想」といった独自の概念が、マルクス主義国家論や党派的な思考を超えたと高く評価された。その上で、権力を悪として「国家の廃絶」を志向する姿勢には、「国家や権力は悪という考え方ではなく、どういう権力ならいいのかと考えなければ」（加藤）などの異論が出た。

討議が沸いたのは、ポストモダンの立場の人々から何かと批判される吉本が、実は「真のポストモダニスト」であるという大沢氏のユニークな論。吉本思想から「思想の相対性を乗り越える超越的な他者」の視点を取り出すものだ。他の三人からは批判されたが、大沢の参加で同世代だけの議論にならなかったことが、シンポを刺激的なものにしたことは間違いない。

強烈な個性を持った吉本隆明の思想から新たな意味をくみ出し、乗り越えようとする意気込みの伝わるシンポだった。

『金儲けがすべてでいいのか』

チョムスキー著／山崎淳訳

経済のグローバル化にもの申すが

（東京工業大学教授）橋爪大三郎

天才的な言語学者チョムスキーが、経済のグローバル化を徹底非難する評論集。9・11テロ後にぴったりの内容だが、出版は1999年だ。

チョムスキーが反対するのは、新自由主義（ネオリベラリズム）という名の怪物である。これは弱肉強食の、19世紀の帝国主義が再来したもの。当時の帝国主義と違うのは、民主主義の装いをとっていることだが、そのなかみは「同意なき同意」にすぎない。大企業がメディアを通じて繰り広げるプロパガンダに、人びとが操られているのが実態だ、という。

たとえば、96年の選挙で共和党のギングリッチは人びとの支持を集めたが、彼のいう「アメリカとの契約」の内容をよく知っている人ほど支持率は下がっている。すなわち、新自由主義のブームは、よくわかっていない有権者の盲動、ということになる。

新自由主義は、ひと握りの金持ちがますます金持ちになる市場万能の政策で、大多数の人びとの人権は無視される。そればかりか、アメリカの企業は利益を求めて世界に進出し、独裁政権を支持したり、第三世界の貧困を拡大させたりしている。アメリカに対する全否定が、本書の基調である。

本書を読んで思い出したのは、映画『ビューティフル・マインド』のジョン・ナッシュだ。ゲーム理論の「ナッシュ均衡」に名を残す天才数学者ナッシュは、あるときアメリカ政府の諜報機関から任務を託されたと思い込み、日夜、暗号解読とレポートの作成に明け暮れる。本人が善意に満ち真剣であるだけに、その痛々しさは倍加する。社会生活の不得手な数学的天才、しかも旺盛な倫理観にもとづいて課題に邁進するという点で、チョムスキーに通じるものがある。

もうひとつ似ているのは、新左翼過激派の機関紙だ。景気指標や政治情勢など客観的なデータをつなぎあわせ、断末魔の資本主義システムが明日にも崩壊するかのような主観的な図柄が描かれる。どこかにトリックがあるはずだが、偏執狂的な書きぶりが、それに蓋をしてしまう。

文藝春秋・1429円

アメリカでのチョムスキーの受け取られ方は、「プッツン系知識人」といったところではないかと思う。理論言語学の輝かしい業績は別として、まともに相手にされないのだ。

チョムスキーの主張に幾分かの真実が含まれることを認めつつ、私がそれに同意しない理由を考えてみよう。アメリカの存在とふるまいは、そんなにも否定すべきものなのか。

アメリカという国が存在することには、世界史的な必然があると思う。

産業革命から2世紀あまり、アメリカの覇権が確立したのは、どのようにしてだったか。

産業革命はヨーロッパで始まった。歴史と文化伝統が豊かな旧大陸でなければ、それは不可能だった。そして産業革命は、物資の移動を容易にする。それまで移住が困難だった新大陸に、伝統の束縛を離れた移民の新国家ができあがる。人口が稀薄なぶんだけ、一人あたりの資源は豊かだ。比較優位によって新大陸（アメリカ）が富を集積するのは自然のなりゆきだ。アメリカの優位は、旧世界に対する新世界の工業文明の優位なのだ。

旧世界は、歴史と文化伝統の差異によって、宿命的に分裂し対立する。それに対してアメリカは、そうした対立から相対的に自由である。その結果、ますます強大となり、軍事的な覇権を握り、自由貿易にますます大きな利益を見出すようになる。

チョムスキーは、アメリカが世界の人びとを貧しくすると言う。だが、もしもアメリカとその工業力が崩壊すれば、まっさきに生存が危うくなるのはその貧しい人びとなのだ。60億を越える世界人口は、アメリカに象徴される高度な工業力なしに支えられない。この現実を認めるなら、アメリカを非難し攻撃するより前に、アメリカの行動原理を丁寧に少しずつ組み換えるのには、どういう種類の忍耐強い努力が必要なのかを考えるほうが大切だ。

Books　どくしょ

読書 2002年 私の3冊

東京工業大学大学院教授　橋爪　大三郎

言語的思考へ　竹田　青嗣著　径書房　2200円

動物化するポストモダン　東　浩紀著　講談社現代新書　660円

〈民主〉と〈愛国〉　小熊　英二著　新曜社　6300円

竹田青嗣の『言語的思考へ』。レトリックを振り回すだけで現実と向きあわず、マルクス主義が退潮したあとの混乱を増幅したポストモダン思想。その誤りの根本を、デリダのフッサール批判にさかのぼって検証する。

フッサール現象学が、著者の手にかかると、言語を介して人間同士が信頼しあう社会公共の思想としてよみがえる。バブルから空白の十年をへて、人びとがこの国の進路を切り拓いていくための指針となる、重量級の業績だ。

東浩紀『動物化するポストモダン』。ゲームの世界を素材に、大きな物語を信ずるでもなく、代わりの物語を見つけるでもない若者たちが、分散した情報のなかで中心のないデータベース的な世界を浮遊する様子を描写。実体のない欲望しか信じられない「動物化」するインターネット世代の現実を、説得力をもって提示する。

小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』。敗戦から一九七〇年までの時期に、日本人が何を感じ何を考えたかを、膨大な言説を整理するなかから検証する。もはや忘れられた戦後の実態を発掘し、私たちが知っている「戦後」のイメージを覆していく。

さまざまな論者が戦争体験をどのように踏まえたかを、特に丹念に取り出している。ナショナリズムの再構築が試みられているいま、必ず参照すべき一冊となるはずだ。

9・11テロ1周年を前に問う

敵への「ギフト作戦」巡り論議

論座9月号

大澤真幸さん

橋爪大三郎さん

9・11テロとは何だったのか。アフガン空爆は正しかったのか──事件1周年を前に、テロとアフガン攻撃の意義を問い返そうとする論考が月刊誌で出始めた。「論座」9月号では、東工大教授の橋爪大三郎さんと、京都大学助教授の大澤真幸さんという2人の社会学者が対論。大澤さんが示す「ギフト作戦」というユニークな提案への評価を軸に、議論している。

橋爪さんは、9・11テロ後の世界秩序を回復するために戦争がいかに意味があるかを強調してきたという。「戦争をしなかった場合の危険」のほうがはるかに大きいからで、「戦争の不可避性」を考えるべきだという立場だ。さらに国際法として「テロに対抗して戦争を起こしていい」という先例になったとして、米国を中心としたアフガン攻撃を「成功」と見る。

一方、大澤さんはアメリカの軍事行動が「テロリストの予想通り」で、「それこそがアメリカ＝悪の図式を裏づける」ため効果はなく、逆に「テロリストにとって最も裏切りになる行為」をしなければテロリストを除去できないと論じる。国際政治的に言えば唐突感はあるが、それは具体的には、テロ国家への「大幅な経済援助、贈与」つまりギフト作戦となる。

大澤さんもギフト作戦が「アメリカの基本的な正義感に反する」ので、「なかなか受け入れられない」とは認めつつ、自分たちの「社会システムをつくっている基本的な論理」を変えない限り、根本的な解決にはならないという考えだ。その論理とは資本主義システムの「交換の原理」で、それを「機軸におくアメリカ的な資本主義を脱構築する」必要を訴える。

橋爪さんは、第2次大戦後に日本を占領した米国が取った、余剰農産物配給などの行動を「大澤さんのギフト作戦によく似た作戦」として挙げ、「アイデアとしては面白い」と認める。だが、アメリカが世界の中心、文明の象徴だからこそ、その存在が憎悪の的になるという構図を「構造的脆弱性」と呼び、それは「アメリカがテロリスト国家にギフトをしたぐらいでは解決しない」と断じる。

ギフト作戦の発想は、対人関係か、人類学が扱う共同体間の力学には応用できるが、「21世紀の国際社会に持ち込むのは、かなり乱暴」とする橋爪さんの批判に、大澤さんは、冷戦以降「国際関係に人間関係のような愛情や憎悪の論理が短絡的に直結するようになった」と反論している。